



## 幼児の手先の発達の

## 実態と考察

菊地明子

あるとき次のような話をきいたことがある。「うちの弟は、祖母がかわいがりすぎてね、小学校へ入っても食事を口までは自分でやるような生活をしてきたものだから、いまだに箸をうまくさばくことができないのよ」

「二人の兄弟のうち、兄は、おべんとうを包む袋を、入れてしまえばすむような袋をつくってやりました。弟の方は幼稚園からの連絡で、年長になってから、大判のハンカチにしました。もう兄の方は、じゅうぶん、物が結んだりすることができる年齢なのに、いまだにうまくいかないんですよ。弟の方がきちんとふるしきなど結びます」

箸をさばく、ものを結ぶ、ともに手先のことである。

昔から、日本人は、手先が器用であり、手工芸にひいでた民族として、世界に知られてきている。伝統的な工芸品はもちろんのこと千代紙、折紙、といったものから、精緻な技術を必要とする精密機械の組立てなど、広い範囲に渡って、その手先の器用さは生かされてきている。しかし、科学の力は、日に日に、手、そのものに代る、機器を駆使し、人間の素手の魅力は、次第に忘れられようとするかにもみえる。

こんなことを考えることがある。手などはずいず、手とは、ボタンを押す、という仕事のみ可能であれば、日常の生活がことたりる、などということになるかもしれない。そうすると、手には、あの愉快な働きをする、五本の活動家——指などは不必要なもの

となってしまうかもしれない。いやいや、退化するには、あまりにも日数が短すぎる。その前に、手そのものは本能的に、素手でものに触れることを望み、あらためて、手づくりということがたいていにされるだろう。現在でもすでに、手づくり、というものは、最高級品を意味しているのだから……。この子どもたちが大きくなる頃は、ますますその手の働きは珍重され、たいせつにされるかもしれない……。

とにかく、幼児の手先の発達に目を向けてみよう。はじめに記した話のように、「あのときさせなかったから、いまだにうまくできない」ということなどをさぐってみることにしたい。

### 手先の発達の実態

幼児の生活の中で手先を使う場面・機会を大きく三つにわけると、次のようになる。

○日常の生活のために手先を用いる。

衣服の着脱、食事、用便、身のまわりの始末、など。

○ものをつくったり、こわしたりする。

ものをかく、折る、ものを切る、ものを接続させる、集める、はなすといった造形的なもの。

○いろいろな運動をする。

ボール（投げたりつかんだり）、鉄棒などにぶらさがるな

ど。

こうした活動の中で、手先はその活動の成否の重要なポイントとなっている。

日常の幼児の活動の具体的な場面で、これをもう少しこまかくみてみよう。

#### 例一 箸をもって食事をする……四歳児

三十六名の幼児の中で二人がスプーンで食べている。箸を持つ位置は少しずつちがうが、二名をのぞいてほとんど正常に扱って食べている。

スプーンで食べている幼児は、常に箸とスプーンを持ってきている。理由は、Aの場合は、まだ箸がよく持てずにこぼすからスプーンを持たせている、ということである。母親は、家庭では、スプーンで食べるものが多いから箸がうまく扱えなくても別にかまわない、という方針らしい。Bの場合は、こぼすといけなから、という理由である。この場合は、やらせてみればできるのに、「うちの子は不器用だから」ときめている傾向がある。四歳児では、ほとんどが自由に箸を扱うことができています。

#### 例二 衣服の着脱

前年末に、園長の話をきくための集まりがあった。「自分のことは自分でしようね」との園長のことは、そして、「それじゃ、みんな、よういドンでその園服ぬいでみよう。ひとり

で、ちゃんどできるかな」

四歳児、五歳児は一斉にボタンをはずし、脱ぎにかかる。

十秒後——年長半数終了。年少でできず。

十五秒後——年長全員終了。年少半数。

三十秒後——年少ほとんどできる。

できた人は坐るのである。

年齢差をはっきり示して、最後の年少児が脱ぎ終わったのは一分後。

ボタン穴は三個、直径二cmのボタンで扱いやすい。

「うーん、みんなできたね」

「それじゃ、こんどは着てみよう」

「よういドン」

十五秒後——年長 $\frac{3}{4}$ 、年少数人。

二十秒後——年長全員できる。年少半数。

三十秒後——年少 $\frac{3}{4}$ できる。

四十秒後——年少ほとんどできる。

脱ぐよりも着る方がやはりむずかしい。

これも年齢差を見せて、最終者完了が一分五秒後。教師は手を貸さないうで全員やり終える。

### 例三 はちまきを結ぶ。(五歳児九月の記録)

うんどう会に、はちまきを用いた。

ひもを自分の目のとどかぬ所で結ぶのは全くむずかしいこと

である。できない人は手伝ってあげるし、友だちとやってあげっこしてもいい、といっておく。

どんな結び方でも(片結び、ねじってとめる、など)頭からおちないようにすればいいことにした。

第一日目、一人でできたもの、男児四名、女児五名、あとは、友だちか教師の手をかりた。ほとんど毎日経験していた。三日目には男児二名、女児一名をのぞいては、友だち同士でやっている。しかしもう運動会も終わり、はちまきをしまうときには、何らかの方法で、一名をのぞいては、結ぶようになる。時間は二十秒。

例四 折紙(14. cm<sup>5</sup> × 14. cm<sup>5</sup>)の中に、小さなまるからだんだん大きなまるをできるだけたくさんかく。

時間は三分間。鉛筆使用。

四歳児 平均十〜十三個のまるをかく。

五歳児 男児十八個、女児十七個。

まるを、うずまきでかいているものは年少児に多い。活動中における、四歳児と五歳児の大きな丸がいはまるをかく早さであった。

### 例五 紙を折る。

紙にひかれた線のとおりに折る。三分間でなん枚折れるか。

四歳児 平均四枚

五歳児 男七枚 女八枚

四歳児は、線など無視しているものが多い。

五歳児は、正確に折っている。

#### 例六 紙を切る。

折紙の中に直径10cmの円をかくておく、それを線のとおりに切らせる。三分間。

五歳児は100%の者が二分三十秒間内にほとんど正確に、円を切り抜いた。

四歳児は、三分間いっぱい使い、70パーセントの者が、線から5mm以上、はずれたりしている。

#### 例七 輪つなぎをする。

クリスマスデコレーションのために輪つなぎを作った。

ここでは、つなぎ方と、糊の使い方を見ることにした。

四歳児、指にのりをいっばいつけて、はりつけるものが多い。うらとうらをはりつけたものがいた。(三名)

五歳児は糊皿の上で糊の量を調節しながら使うことができ、あちこちを糊だらけにすることはほとんどない。

#### 例八 ボールであそぶ。

(1) ボールをつく。

三十一名の五歳児が一斉につき出す。

十五秒後半数だめになる。

三十秒後一ついているのは女児七名。

ボールをつくことは、男女差が多いのだが、このタイムを

はかったときは、すでに、つく、という活動を、みんな何度も経験していたにもかかわらず、やはり女児が残っている。

(2) ボールを受けとる。

からだでできかかえないようにして手先だけで受けとる。

男児でできないもの十五名中五名。

女児でできないもの十五名中六名。

これは男児が優勢である。

#### 例九 くつ下をぬう。

かんれいしゃのくつ下の型を糸と糸針を使用してぬう。

(写真参照)

三十一名中、二十名は自分で針に糸をとおす。

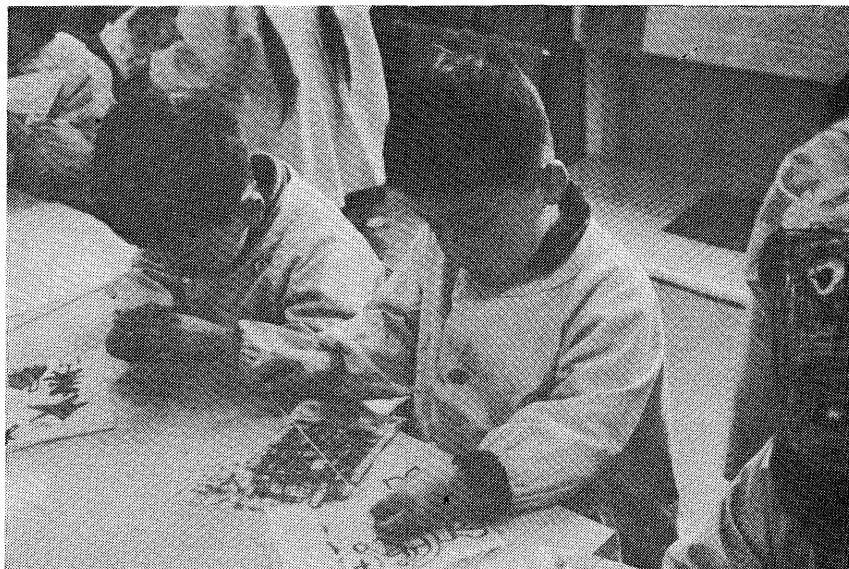
大体普通に縫い合わせたもの、二十三名

糸の長さの調節がつかずちぢめて縫ってしまったもの、五名

(男)かがり縫にしたもの、一名(男)

針目がとて大きく穴があいたところを、セロテープで接着したもの、一名(男)

これは毎年、クリスマスの子どもの会のようにプレゼントを入れてもらうための用意である。年少のときは、和紙を糊ではって作った。ものを接着、つなげるのには、糸と針を使うこともできる、というので与えてみた活動であるが、男女を問わず興味をもって熱中してやる。目的が、プレゼ



くつ下をぬう。(かんれいしゃを毛糸でぬう)

ントを入れるくつ下ということもあるかもしれないが、日頃、落着かないような男児が集中してとりこんでいる姿がみられた。絵の上にステッチでししゅうのようなことをしたものの、一名(男)

実態からみて考えること

以上、園生活の日常の中で、手先の発達の実態をとらえてみた。数的に、また質的、内容的に、はなはだ科学的ではなく、機会をとらえてメモしたものが多く、そういった点からは参考にはならないかもしれないが、とにかく、彼らの生活の中で、手先はこうした実態をみせながら、学習され、いろいろなものに習熟していつている。手先の基本的な発達は、十五ヶ月の頃に第一段階の成長を遂げているとみてよい。ものをつかむ、はなす、などのことである。それ以後は、さらに五本の指をうまくあやつり、さらにこまかい仕事ができるようになってくる。ちょうど、四歳、五歳は、その第二の完成期に当たっているように思われる。ものを折る、ものをかく、ものを切る、といった、活動のひとつの完成したかたちができる時期だと思う。興味を持って使おうとしたとき、そのときが、そのものに対する習熟の時期であるといえよう。食事などのことに関しては、すでに家庭で、手づかみにしながらも口の中へ食べものをつかんで入れる、という段階から、器具を使って食事ができる、というところまで、三歳児の頃にたど

りついているはずである。この例にみられるA、B、の両児とも、おとなの尺度で結果を考え、できないからやらせない、という姿勢を常に見せていて、一向に経験はなされず進歩がなかった。結果は、そのへんにこぼれて始末がたいへん、ということになっても、まず、やらせなければ習熟することはできない。

例二などに現われた、常におそい子、にも同じような親の態度がみられた。

例三以後は、二学期の実態でもあり、一応園生活の中で、各時期にねらいとしてとりあげられ、経験のつみ重ねがみられ、できない、扱えないなどの問題がある、というものは見当たらないが、やはり個人差は見逃せない。そして、こうした個々の実態の背後には、性格的な傾向、興味の程度、家庭での問題などがあり、手先の働きひとつをとっても、ひとりの幼児のさまざまな面が浮きぼりにされて興味深いものがある。年少時に、入園当初から約二ヶ月位クレヨンを持つとうとしなかった男児Wが、まるをかいいたり、切ったりすることに最も能力のあるところを見せられた。当時、母親は、「うちの子は、不器用だから絵をかかない」と言っていたものである。彼は不器用だからクレヨンを持たないのではなくて、園生活に対する不安や、新しい経験に対しての緊張がそうさせていたのであり、教師の接し方を「させようさせよう」とする態度から、他の遊びや生活の面での接触を深めることに変えると、そうしたカラ、がとれ、こうしたことにも積極的

にとりくむようになっていたのである。

幼児といえども、その心の表出されたところは複雑である。

園での活動の中で、こうしたごくあたりまえのこと、そしてやもすると見逃されていがちな『手先のこと』に関して、次のようなことを考えて指導に生かしたいと思っている。

○入園当初の個々の実態を、できるだけありのままに明確に把握すること。(はさみの使い方、洋服の着脱などである)

○過程において、そうした実態把握のうえにたつて、個人指導をくりかえすようにすること、はげまし、根気がポイントとなる。そして、ひとつでも成功のよろこびを実感として味わわせることである。

○家庭での子どもに対する態度をよく知り、もしも、考えにあやまりや、不足がある場合、じゅうぶんに話し合うこと。「うちの子は、親に似てこうだから」ということばですべてを結論づけないようにしたいものである。

以上、あくまで、園生活の日常の中での実態を中心に記してみた。ほとんどメモ程度のものであり、科学性に欠けている。しかし日常の指導の中で把握できる実態、という意味で記してみた。この課題を与えられた機会に、もう一度、ゲゼル等の『乳幼児の発達と指導』を参考に読みかえてみたが、その観察の正確さをさらに強く感じた。

(月島第一幼稚園)